



佐伯 YUME-KAGURA SAIKI

ゆめ神楽

参加神楽団

浅原神楽団

河津原神楽団

津田神楽団

教室子供ダンス発表

入場
無料

日時

令和8年

5/3日

開場 9:30 開演 11:00 14:00ごろ閉演(予定)

会場

佐伯総合スポーツ公園 アリーナ

広島県廿日市市津田 545番地

主催: イズミテクノ・シンコースポーツ共同企業体

後援: 廿日市市

演目

- ◆ 浅原神楽団……葛城山
- ◆ 河津原神楽団……道がえし
- ◆ 津田神楽団……荒目平



出演団体と演目の説明

◆ 浅原神楽団 / あさはらかぐらだん

浅原神楽団が結成されたのは、明治六年ごろと言われています。

当時、浅原亀山神社に奉納されていた、『神輿(みこし)』の色彩修理のため、旧宮内明石(現在、廿日市市宮内明石)の住人が業(ぎょう)のかたわら、浅原の青年達に『明石の神楽』として伝承され、以後代々受け継がれていました。

昭和47年頃、継続者が無く、一世代超え「浅原子供神楽団」として継続しました。子供達も大きくなり、昭和59年に「浅原神楽団」とし、当時の十二神祇神楽に加え、六調子系、八調子系の神楽を取り入れ活動しています。

葛城山

大和の国葛城山に年古くより住む土蜘蛛の精魂は、天下を攪乱しようとするが、源頼光のために念願を果たすことが出来なかった。ある時、頼光は重い病に罹り侍女胡蝶を典薬頭に遣わしたが、土蜘蛛の精魂はこれを待ち受けて取り喰らい、自ら胡蝶に化け、頼光に典薬頭から授かった薬と偽って毒薬を飲ませて襲いかかる。

頼光はその正体を見破り、伝家の宝刀「膝丸」で切りつけて深手を負わせる。正体を見破られた土蜘蛛の精魂は葛城山へと逃げ帰る。頼光はこの太刀を「蜘蛛切丸」と名を改め、四天王の卜部季武・碓井貞光にこの刀を授けて土蜘蛛を退治するよう命じる。

卜部季武・碓井貞光の両名は葛城山に向かい、土蜘蛛の妖術に悩まされながらも、これを退治する。

◆ 河津原神楽団 / かわつはらかぐらだん

河津原の神楽(かぐら)舞(まい)は明治10年ころから舞われ、140年あまりの伝承の歴史をもっています。

元来は「十二(じゅうに)神祇(じんぎ)」と呼ばれる神祇舞で、河(かわ)津原(つはら)八幡(はちまん)神社(じんじや)への奉納(ほうのう)神楽(かぐら)であり、幣(へい)や幡(はた)、扇(おうぎ)などによる払い清めを基調に置き、舞の美を見せるものでした。近年では、「十二神祇」を伝統と歴史ある舞として、保存・継承するとともに、「高田系八(たかだけいはつ)調子(ちょうし)」や、「石見八(いわみはつ)調子(ちょうし)」を取り入れながら、見て頂くお客様はもちろんのこと、舞手も楽しめる。河津原神楽団独自の新しい舞の創造・研究にも力を入れております。

道がえし

武(たけ)甕(みか)槌(づち)の命(みこと)が異国から来て人々を食い殺そうとする大悪鬼を退治しようとする、悪鬼はこの国のいわれを述べよと迫る。命は、この国は天皇が政治をしている国なので、鬼の住みかではないというと、鬼は全世界を制圧しているものだから、自分に立ち向かうと、爪先に引っかけて空に蹴り上げ、落ちる所をかみ砕くと言って抵抗する。結局、争いとなり、鬼は降参する。

◆ 津田神楽団 / つたかぐらだん

津田神楽については、文化三年に書かれた神楽舞「天大将軍」の云いたてが神社に保存されており、又、天保七年十月九日夜、花上黄幡神社の神楽執行、慶応三年八月十四日夜、八幡宮で「氏子中、夜通し神楽舞う」等と記述された文書が残されていることから、その頃にはすでに舞われていたもよう、明治の末頃までは毎年八月末から十一月吉日まで舞われていたものの、その後衰退、復興を繰り返し、昭和五十二年以降、毎年十月第二日曜日の大祭の前夜に、津田八幡神社、拝殿で舞い続けられ、現在に至っています。系統としては、安芸十二神祇に属するものとされています。

荒平

この舞は別名「柴鬼神」ともいい、これに出てくる鬼を「荒平」とも「世鬼」とも呼び、神仏を守護し奉る鬼であると言われています。「言い事」からして荒ぶる神「素戔鳴尊」の化身であるということになっています。よって鬼の形相をしています。角はありません。この鬼神と問答する太夫を「法利」といい、これはこの荒ぶる神である「荒平」を刀によって斬り殺すのではなく、人の三徳「仁・智・勇」をもって問答によりその「荒ぶり」を封じこめる筋になっています。

清目

この舞は四人の太夫によって舞う優雅な幣舞で、二畳一坪の内で舞うものです。舞振りとしては「じゅんぎやく」「ざがわり」「よなり」「はいとう」など神楽団の舞い方の基本動作がすべてといってよいほど盛り込まれており、持ち物としては「幣」と「鈴」を使い、変化に富んだ舞です。